『週刊ポスト』2019.6.17(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第82回 弘田三枝子が贈り返したアンサーソングの相手

小学生の頃、私にとってのスターは坂本九と弘田三枝子でした。理由は単純で、九ちゃんの『ステキなタイミング』『カレンダーガール』、ミコちゃんの『すてきな16才』『ヴァケーション』が大好きだったからです。

どれも英語の歌詞が含まれていた米国産のカバー曲で、日本語で歌われるところしか理解できなかったにもかかわらず、父親が好きだった東海林太郎や三浦洸一らが歌う歌謡曲とは明らかに異なる点に惹かれたのでしょう。

九ちゃんもミコちゃんも、近所にいそうなお兄ちゃん・お姉ちゃんといった身近な雰囲気を漂わせていたうえ、今振り返れば、日本語歌詞のア行の発音がハ行になるなど、二人には共通する特徴がありました。「上を向いて」が「ふへほむひて」となり、「おねがい」が「ほねがひ」と聞こえる唱法です。

今年の3月にNHKで紹介されて話題を呼び、歌謡曲ファンに広く知られるようになった桑田佳祐のライブイベント「ひとり紅白歌合戦」は、過去に3回行なわれ昭和期の歌だけでも約140曲披露していますが、坂本の『上を向いて歩こう』『見上げてごらん夜の星を』、弘田の『人形の家』が歌われています。

サザンオールスターズが昭和57年にヒットさせた『チャコの海岸物語』の歌詞に登場する「ミーコ」は弘田三枝子を指し（チャコは飯田久彦ですね）、翌58年7月発売のアルバム『綺麗』には、ミエコという歌手を登場させた『MICO』という曲を収録して弘田に捧げています。そして直後の同年9月、別のレコード会社から「MICO」という名の覆面歌手が『O-Kay』というシングル盤をリリース、なんとその正体は弘田三枝子で、ジャケット裏面に「オー・佳！」と綴られていることから、前記の桑田作品『MICO』へのアンサーソングを意味していました。歌詞カードに「作詞作曲・MICO、編曲・川口真」と表記されていることから弘田自作の曲のようですが、弘田がそれまで歌ってきたカバー曲や、橋本淳&筒美京平コンビによる曲名やサザン関連の歌詞がちりばめられたステキな和製ポップスに仕上がっています。

映画出演が多かった坂本九に対し、弘田にも2本の映画主演作があります。『ヴァケーション』が大ヒットした翌年の昭和38年公開の松竹映画『魚河岸の旋風娘（せんぷうむすめ）』では15歳の弘田が見られます。今から20年ほど前、名画座として知られた大井武蔵野館で同作品がリバイバル上映されたことがありましたが、弘田自身が女優の赤座美代子と鑑賞に来ていました。小さな劇場なので上映中に弘田の屈託なく笑う声が私の耳にも届いてきましたが、生の声は、昭和30年代後半、日本中が東京五輪を目標に「がんばろう！」という気概にあふれていた時代に「アスパラで生き抜こう！」と歌っていたミコちゃんの声と重なり、束の間、私を小学生気分に浸らせてくれました。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的「昭和大衆歌謡考」』第4集『しあわせになろうね』（グスコー出版）が好評発売中